

論文の内容の要旨

論文題目 能因法師の歌風の研究
氏名 巖 教欽

本論文は 平安時代中期に活動し歌人、能因法師（以下、能因）の作品に即しながら、庶幾した歌風とは何か、その歌風に至るためにとった詠歌方法、そしてそのような活動を通して後世どのような影響を与え、和歌史の中で能因をどのように位置づけするかを考察するものである。

勅撰和歌集（以下、勅撰集。そして歴代勅撰集名から「和歌」を省略する）は天皇の命によって編まれる公的な歌集で、勅撰集に名をあげることは、歌詠みとして公的な地位が与えられることである。能因は三番目と四番目の勅撰集である『拾遺集』と『後拾遺集』との間の勅撰集空白期に活動した歌人であるが、生前勅撰歌人にはなれなかった人物である。自撰歌集である『能因法師集』（以下、『能因集』）、私撰集である『玄々集』、歌学書である『能因歌枕』が現存し、『八十島紀』『題抄』『坤元儀』などは散逸し、現存しない。一生諸国への旅を続けた旅の歌人であるが、そのような生き方の原動力となったのは、歌枕に対する飽くなき好奇心であり、『能因集』にはそのような生き方を反映しているかのように、多くの歌枕を詠み入れた歌が見出され、『袋草紙』をはじめとする後代の歌学書や説話集類では、「数寄者」として能因を描写することが多い。しかし、能因のそのようなイメージは他人の撰による書物で「語られた部分」に依存するところが多く、もっと能因自身が著した撰集類で「語った部分」に即して考察することで能因の歌風の特徴を見出し、それが和歌史においてどのような役割を果たしたかを考える必要があるように思われる。

そこで、第一章から第三章までは私撰集である『玄々集』に焦点を当てて能因が自分より先代

歌人たちの歌のどのような部分を重視して撰歌しているかを考察することによって、能因が庶幾した歌風について考えた。第四章では自撰家集である『能因集』に焦点を変えて、第一章から第三章から確認したことが実作の上でどのように反映されているかを確認しようとした。第五章では歌学書である『能因歌枕』、その中でも歌枕が並べられている「国々の所々名」に注目して、そこに記載されている内容を『玄々集』と『能因集』、そして歴代勅撰集の歌枕と比較することで、「国々の所々名」の性格と同時に、『能因歌枕』の成立年次を考えることにした。最後の第六章では、第一章から第五章まで考察した能因の詠歌の歌風を基盤に、新古今時代の能因の受け入れ方を考えることで、平安時代から中世への架け橋としての能因という歌人がもつ特性と位置づけを試みることにした。

第一章「『拾遺集』との重出歌からみた『玄々集』」では、『玄々集』にみられる、三六首の『拾遺集』との重出歌を手掛かりに考察した。『拾遺集』との重出歌をA群、『拾遺集』との重出歌歌人の『玄々集』で新たに撰ばれた歌をB群、『拾遺集』との重出歌を持たない歌人の歌をC群と分けて、勅撰集の部立分類に沿って分析した結果、撰歌において、能因の個人的な経験が反映されている『能因集』と通じる部分が多くみられた。詠風においては、『拾遺集』重出歌から伝統的な詠法の歌をとりながら、それに甘んずることなく、新しい歌風を提示しようとしたと思われる。機智や複雑な技巧に走ることなく、ひとすじに詠み下す詠法と、淡々と叙景を詠みながらそのなかで抒情を醸し出す詠法がそれである。

第二章「『玄々集』所収長能詠の撰歌意識」では能因の歌道上の師匠であり、『玄々集』の最多入集歌人である藤原長能の入集歌の分析を試みた。能因は『玄々集』を編むにあたって、『拾遺抄』以前に詠まれた可能性のある長能詠も撰歌対象としたが、他の撰集類にとられた歌はとらない方針を通して、自分の師の歌を自分の撰歌眼で撰ぶことを前面に打ち出した。その撰歌眼で撰ばれた歌の歌風は、『伊勢物語』の影響が想定できる歌・古今時代の歌人たちの歌の歌語や発想を踏まえた歌・長能が活動した時代にすでに古いとされる万葉時代の歌語を詠み入れた歌が見られ、保守的な宮廷歌人としての一面が重視しながら、色の鮮明なコントラストに主眼を置いた歌や、色のないものに色を見つけ出す詠み方の歌を撰ぶなど、師の歌の優れている点を訴えると同時に、既存とは違う独自の撰歌眼を見せる意図があったと思われる。

第三章「藤原公任に対する認識」では『玄々集』の公任詠と関連説話を中心に、能因の公任に対する認識を論じた。能因が活動していた時代にもっとも重要な位置を占めていた歌人は公任で、藤原道長を頂点とする撰関期の歌壇の権威であった。説話類からは公任が能因を歌人として高く評価しなかったと思われ、それは人間関係と同時に、能因の詠みぶりが『新撰髓脳』における公任の歌論に照らし合わせた時、適わなかったからだったと思われる。能因が『玄々集』に公任の歌を撰ぶ際にも、自分の師である長能の歌をもっと多くとるなど人間関係が考慮されたと思われるが、歌風の面では、技巧がほとんどない素直な詠みぶりの歌を撰んでいる。そして 前の用例をしっかりと踏まえた、奇抜な歌語や新奇な

表現があまりみられない。同時に、伝統的な擬人法に基づきながら新しい歌語を詠み入れた歌や、賞賛の対象であった月を哀しさを増幅する媒体として詠んだ歌を撰ぶなど、伝統的な素材や詠法を踏まえながら新しさが醸し出される歌も評価しているが確認出来た。

第四章「『能因集』における作歌方法」では焦点を『能因集』に変えて、第一章から第三章にかけて考察して得られた結果が『能因集』にはどのように適応できるかを確認した。『能因集』からは、歌に心を染めて習作を行った時期から三代集の読人知らず詠を踏まえ詠む姿勢がみられ、その詠歌方法としては、単純に歌語をとる場合・一、二句を採用する場合・発想を利用する場合・述懐歌を踏まえて恋歌に、恋歌を踏まえて情景歌として詠むことなどが確認される。同時に、『伊勢物語』を背景において詠む例もみられ、自分より先立って成立した和歌の伝統的な表現を踏まえて、変化させて詠むことは、能因の普段からの古歌に対する姿勢と知識の蓄積を窺わせる。このような姿勢がもっとも意識的に働いているのが、貫之の歌を利用する場合であり、『玄々集』と『能因集』の序文からは貫之を意識した記述も確かめられる。貫之を言及することは自分の作品に「権威」を与えようとした意図が働いた結果であり、和歌の伝統を尊重し、自分をその流れの中に位置づけようとする、強い願望を持っていたことを物語る。

第五章「『能因歌枕』の「国々の所々名」考」では歌学書である『能因歌枕』、その中でも国別に歌枕を集成した「国々の所々名」を取り上げて考察した。「国々の所々名」は、生涯をかけて旅を続けた能因であることを考えると、能因の歌人的特性とよくあらわしている部分と思われるので、『玄々集』と『能因集』の歌枕、そして歴代勅撰集の歌枕との比較を試みた。『玄々集』と『能因集』の歌枕の中、「国々の所々名」からその記載が確かめられるのはそれぞれ約40%強で、これを分析した結果、「原『能因歌枕』」あるとしたら、その成立年次は『能因集』より約十年前ではないかと想定した。歴代勅撰集の歌枕と比較すると、約30%強が「国々の所々名」から記載が確認される。そしてこの30%中には、能因が生前確認出来たはずの三代集から用例を全く確認出来ない地名も約37%含まれていて、能因は勅撰集に入集することによって和歌の伝統に生きている歌枕を収集する傍ら、いまだ市民権を得ていない地名にまで目を配っていたと思われる。

第六章「新古今時代の能因受容の様相」では『千載集』が成立してから『新勅撰集』が成立するまでの約五〇年の間を新古今時代と規定し、能因の歌や能因が提示した歌枕等がこの時代にどのように受容され、評価されたかを考察した。この時代に注目したのは、能因が『後拾遺集』以来再び『新古今集』において評価されたからであり、『古来風体抄』や『八雲御抄』のようなこの時代の歌論書に能因の名が取り上げられているからである。『新古今集』以前の勅撰集初出の歌枕が『新古今集』に再び登場する時、その間に能因の作品を介在して考えることが出来ることを指摘し、『新古今集』に陸奥の歌枕が多くみられる背景に能因の旅の影響を想定した。また、西行と定家という、新古今時代を代表する二人の歌人の作にみられる能因の受容を考察した。西

行は普段から能因に深い敬慕の念を抱いていて、それが行動と歌にあらわれる事を確認した。定家の場合は『定家十体』入集の五首の能因詠を考察することによって、『毎月抄』において対照的な歌体のような書き方になっている「幽玄様」と「拉鬼様」、「長高様」と「濃様」にそれぞれ能因詠を撰入し、能因詠の多面的な要素が注目されていたことを確認した。

以上の考察から、能因は和歌の伝統を重んじ、その流れの中に自分を位置づけようとしながら、それに甘んじることなく、体験することによって新しさを追求した歌人であったことが確かめた。閉塞した時代に対する沈淪意識で旅立ったからこそ、和歌の伝統への執心が人一倍であったと考えられ、自分の前にある和歌の蓄積を価値のある古典として認識し、それを主体的・積極的に踏まえることで独自の歌風に到達しようとした。それが能因にとっての「歌道の中興の方法」であったと思われる。新古今時代の歌人たちには、能因のそのような部分が受け入れられ、『新古今集』に多く入集され、歌学書類でその名が取り上げられるようになったと思われる。この意味で、能因の歌風は本歌取りが本格的になる中世和歌と繋がる要素をもっていたと評価でき、中古から中世への橋渡しの役割を果たしたといえる。